印度學佛教學研究第42巻第２号
平成６年３月　　　　抜　刷

Sukhāvatīvyūha の韻律と言語：歎仏偈・重誓偈

阪本（後藤）純子

訂正表

		誤	正
p.59	l.4	sukhāvātī	sukhāvatī
p.65	l.21	atulya	atulya-
p.67	l.4	sg.	pl.
p.67	l.10	śri-	-śrī-
p.69	l.10f.	「ないし」の後に挿入「直接動詞語根から作られる」	
p.71	l.14	ÖTTINGER	OETTINGER
p.71	l.26	brāhmrī	brāhmī
p.73.	l.4	paramaṃsukhaṃ	paramaṃ sukhaṃ
p.74	l.19	追加：Mahābhārata XII 74,26 善人の死後の世界が黄金の光輝を持つ。	
p.75	l.17	苦楽	すべての苦しみ
p.76	l.9	ubho の前に挿入	na (Ed.B Ed.S Ud.a; Ed.PTS 欠如)
p.76	l.13	appati-ṭṭhaṃ	appatiṭṭhaṃ
p.78	l.17	Prakrit-Sprache	Prakrit-Sprachen
p.78	l.18	Language	Languages

Sukhāvatīvyūha の韻律と言語：歎仏偈・重誓偈

阪本（後藤）純子

1. Sukhāvatīvyūha 大本（SukhV：梵文無量寿経）は散文に偈頌が混在し，その偈頌は従来漢訳諸本（特に大阿と覚経）の比較からSukhV原初形態に属さないと推測されてきた。これに対しSkt.原典の韻律・言語・思想の検討結果は，SukhVの偈頌が成立状況・年代の異なる諸層に分かれ，その一部「歎仏偈」が非常に古い起源に遡る可能性を示唆する[1]。

2. 1. ［SukhV の構成］《前半》A. 遠い過去世に比丘 Dharmākara（法蔵）が如来 Lokeśvararāja（世自在王）に語りかける；B. 仏の光明と徳を讃歎し，私も仏になろうと決意［歎仏偈］；C. 多数の仏土の vyūha「配置，設計」を取り入れ，自らの仏土に関し47の誓願をなす；D. 誓願を簡潔に示し，成就するなら大地が振動するよう求める［重誓偈］；E. その後長く菩薩行を実践。《後半》A. 法蔵の後身たる如来 Amitābha/Amitāyus（阿弥陀；註9）と西方にあるその仏土 Sukhāvatī（Sukh）の描写；B. 仏言を聞き信じる福徳［聞信偈］；C. 阿弥陀の名を聞き念ずれば彼を見，Sukhに再生；D. 多数の菩薩が Sukh を見に来る，阿弥陀が微笑し Avalokiteśvara（観音）にその理由を説明［東方偈］；E. Sukh の衆生の描写；F. Ānanda が望むと阿弥陀は光明を放ち自らを見せる；F. 釈尊は Ajita（：Maitreya「弥勒」）に Sukh への再生を詳述し教説の伝承を託す；G. 教を聞き信ずべき事［流通偈］。全体は釈尊が Ānanda に語る形式をとり，序と末尾の散文に帰敬偈と縁起法偈が加わる。

SukhV の主題は題名が示す通り阿弥陀の仏土 Sukh の *vyūha*「整然たる配置・設計」とこれに呼応する法蔵の47誓願であるが，過去物語と現在説法は画然と分かれ，Amitābha/Amitāyus, Sukh の名は前半に言及されず，また比丘 Dharmākara, 如来 Lokeśvararāja は後半に登場しない。また後半の偈頌が3人称で阿弥陀や Sukh を客観的に描写するのに対し，前半の偈頌は仏に対する1人称形式の語りかけで，固有名詞[2]や *tathāgata* の語が現れない。特に歎仏偈は SukhV の他の部分の内容を前提とせず独立性が強い；重誓偈には歎仏偈や47誓願と重複する点がある。

2.2.　［偈頌の詩節数と韻律］1. 帰敬偈(2)：vaṃśasthā (1), rucirā (1)；2. 歎仏偈 (10)：(proto-puṣpitāgrā 的) aupacchandasaka；3. 重誓偈 (12)：proto-puṣpitāgrā；4. 聞信偈(5)：triṣṭubh (tri.)/jagatī(jag.)；5. 東方偈(21)：tri./jag.＋vaitālīya；6. 流通偈(10)：tri./jag.＋śloka；7. 縁起法偈(1)：āryā。1は新しいタイプの古典 Skt. 韻律で，二次的に散文から作り変えられたと推定される[3)]。7は小乗経典古層にある āryā 詩節の引用で Gaṇḍavyūha 末尾にも現れる[4)]。経典本体の偈頌の中，前半 2・3 は中期インド語特有の韻律とその発展形であるが，後半 4・5・6 は伝統的な tri./jag. を主体とする；中期インド西北方言的現象も前半 2・3 に頻出し後半 4・5・6 には少ない。

2.3.　SukhV には漢訳5種と Tibet 訳が現存するが[5)]，偈頌における対応関係は不均一である。（○：よく対応，△：ほぼ対応，—：対応なし；数字は詩節数）

	1. 帰敬偈	2. 歎仏偈	3. 重誓偈	4. 聞信偈	5. 東方偈	6. 流通偈	7. 縁起法偈
大　阿	—	—	—	—	—	—	—
覚　経	—	○	—	—	○[連続：往観偈(20＋11)]		—
寿　経	—	○	○(11)	—	△[連続：往観偈(20＋11)]		—
如来会	—	○	○	—	△	○	—
荘厳経	—	○	○	—	△	△	—
Tibet	—	○	○	○(7)	○	○	—
Skt.	2	10	12	5	21	10	1
[主役]		[法蔵比丘（1人称）]		[阿弥陀如来(3人称)]			

1と7は Skt. 以外には知られず，最新段階の成立・引用を裏付ける。4は漢訳の原典諸本が分岐したのち Skt./Tib. 系伝本において成立し，更に Skt. からの分岐後 Tib. 原典において増広されたようだ。前半部の2は大阿以外の全漢訳によく一致するが，3は覚経に欠け，両者の韻律の新旧と対応する。後半部の5・6は共に大阿を除く全漢訳に現れるが，内容・順序が必ずしも一致せず，覚経・寿経の原典諸本の成立時にはまだ流動的状態にあったと推測される。

2.4.　以上の諸事実の総合は，各偈頌グループが相異なる年代・状況において成立したことを示唆する。現存の SukhV は起源や性格の異なる様々な偈頌や散文をモザイク状に寄せ集めたもので，漢訳・Tib. 訳の原典諸本の成立より明らかに新しいが，構成要素である個々の偈頌・散文の起源と成立状況は改めて原典批判に基づき探求されねばならない。さらに前半過去物語と後半現在物語の間に

は，内容・文体・言語・韻律の全てにわたって本質的相違が認められる。

3.　［歎仏偈・重誓偈の韻律］ Veda 韻律から発展し Epic から古典 Skt. に至るまで広く用いられる śloka と tri./jag. が音節の数と軽重により規定されるのに対し，中期インド語（Pāli・Ardhamāgadhī・BHS）になって初めて現れる韻律グループ mātrāchandas (mā.)[6] は，mātrā というリズム単位に基づく音楽的性格をもつ。mā. の使用範囲は時代的にも文献ジャンルの面でもかなり限定され，早くにすたれて他の韻律グループに吸収されてしまうために，かえって年代決定や成立層の分析に重要な役割を果たす。最も古い段階の mā. は Pāli 経典に現れ，句前半部では mātrā 総数の範囲内で大幅な自由が許される一方，後半部の形は固定される。時代が下るにつれ形態の自由は徐々に失われる；土着韻律学の mā. 規定（Piṅgala Chandaḥsūtra 等）では幾分か限定され，やがて完全に固定されて古典 Skt. の akṣaracchandas 類に転化する。aupacchandasaka (aup.) は mā. 類の代表的韻律の一つであり，その 1 変種から puṣpitāgrā (puṣp.) が発生する。

1)	aup. (Pāli)：奇数句	6mātrā＋–⏑–⏑–⏓；	偶数句	8mātrā (9m.)＋–⏑–⏑–⏓	
2)	aup.（土着韻律学）：	⏕⏕⏕　–⏑–⏑–⏓；		⏕⏕⏕⏕	–⏓–⏓–⏓
3)	proto-puṣp.；	⏕⏑⏑⏑⏑　–⏑–⏑–⏓；		⏕⏑⏑–⏑⏑	–⏑–⏑–⏓
4)	puṣp.：	⏑⏑⏑⏑⏑⏑　–⏑–⏑–⏓；		⏑⏑⏑⏑–⏑⏑	–⏑–⏑–⏓

歎仏偈の韻律は aup.，重誓偈は proto-puṣp. で句前半部の形態は次の通り。

《歎仏偈（10偈）》（数字は偈番号）

奇数句	⏑⏑⏑⏑⏑⏑	1a 3a 9a 10c	［20％］
	–⏑⏑⏑⏑	1a 2a 2c 5a 5c 6a 6c 7a 7c 8a 9c	［55％］
	––⏑⏑	3c	
	⏑⏑–⏑⏑	4a (4c?) (10a?)	
	⏑⏑⏑⏑–	8c	
	⏑⏑⏑⏑–⏑⏑	4c 10a（8mātrā の不規則形）	
偶数句	⏑⏑⏑⏑–⏑⏑	1b 1d 2b 2d 4b 4d 6b 6d 8b 9d 10b 10d	［60％］
	–⏑⏑–⏑⏑	3b 5b 5d 8d 9b	［25％］
	⏑⏑––⏑⏑	3d 7b(?) 7d	
	–⏑––⏑⏑	7b（9mātrā の特殊形？）	

《重誓偈（12偈）》

奇数句	⏑⏑⏑⏑⏑⏑	下記以外の全句	［87.5％］
	–⏑⏑⏑⏑	1c 5c 12c（1c 12c は本来 ⏑⏑⏑⏑⏑⏑ と発音？）	

偶数句　⏑⏑⏑⏑–⏑⏑　下記以外の全句　[79%]

–⏑⏑–⏑⏑　2d 3d 4d 8d 12b（すべて本来 ⏑⏑⏑⏑–⏑⏑ と発音？）

歎仏偈は proto-puṣp. 的傾向が強いがまだ幾分かの自由さを前半部に残し，最終段階の aup. として2と3の中間に位置する；重誓偈は完全な puṣp. に近い proto-puṣp.（3と4の中間）である（従来ともに puṣp. とされたのは誤り）。

aup. が主として Pāli 経典の比較的古層に現れるのに対し，proto-puṣp. は Lalitavistara（Lal）や初期大乗経典など BHS 文献に多い[7]；aup. から proto-puṣp. への移行段階は Mahāvastu（Mvu）などに少数残る。以下に歎仏偈と重誓偈に近い例を挙げ，前半部における（proto-）puṣp. 的形態の比率を示す。

A. Mvu Ⅱ 293-397：Avalokita-sūtra (2)[8] 中の3例の韻律は歎仏偈にほぼ対応し，aup. の最終段階を示す（Mvu 内部では最新層に属する）。

	奇 ⏑⏑⏑⏑⏑⏑	–⏑⏑⏑⏑	偶 ⏑⏑⏑⏑–⏑⏑	–⏑⏑–⏑⏑
a. 356, 3-18（4偈）	無	62.5%	75%	無
b. 361, 4-362, 2（5偈）	20%	60%	60%	10%
c. 371, 10-372, 21（8偈）	37.5%	50%	87.5%	無

B. Lal には典型的 proto-puṣp. が多いが，dはより古い段階を示す。普曜経（A.D. 308 竺法護）との対応：a. 11偈（大正 Ⅲ 490ab）；b.c. 無；d. 全7偈（527c-528a）。7世紀の方広大荘厳経（547bc, 578ff., 598f., 603a）には全偈対応。

	奇 ⏑⏑⏑⏑⏑⏑	偶 ⏑⏑⏑⏑–⏑⏑
a. 49, 5-50, 14（16偈）	66%	56%
b. 240, 9-243, 12（33偈）	57.5%	91%
c. 366, 16-367, 3（5偈）	60%	70%
d. 393, 3-16（7偈）	71%	43(50?)%

C. Rāṣṭrapālaparipṛcchā（Rāṣṭrap）15, 14-17, 2 の 10偈 proto-puṣp. は重誓偈に近い。全偈が徳光太子経（A.D. 270 竺法護：大正 Ⅲ 412ab）に対応を持つ。

奇 ⏑⏑⏑⏑⏑⏑ 80%　偶 ⏑⏑⏑⏑–⏑⏑ 95.5%

D. Saddharmapuṇḍarīka-sūtra（Saddharmap）12章（Bhaiṣajyarāja-pūrvayoga-parivarta）に proto-puṣp. 1偈が孤立して現れ，正法華経（A.D. 268 竺法護：大正 Ⅸ 125c）に対応偈を持つ：第1句 ⏑⏑⏑⏑⏑⏑ 第3句 –⏑⏑⏑⏑ 第2・4句 ⏑⏑⏑⏑–⏑⏑。

詩節総数が少ない上テキストも不確実なので上記の比率は大体の傾向を表すに過ぎないが，ほぼ次のような韻律の発達順序が窺える：[aup. 最終段階：Mvu a→Mvu b・歎仏偈→Mvu c・Lal d]→[proto-puṣp.：Lal（a→c・b）・Saddharmap→重誓偈・Rāṣṭrap]。韻律の新旧とテキストの成立年代は必ずしも一致し

ないが，歎仏偈が大乗仏典として非常に古い段階に位置する可能性が高く，また重誓偈との間に相当の時間の経過が予想される。なお各々の異本の竺法護訳から，Lal（d の全体と a の大部分）は4世紀初頭までに，Saddharm と Rāṣṭrap は3世紀後半までに既に成立していたと考えられる（註5をも参照）。

4.　［歎仏偈・重誓偈の言語］歎仏偈と重誓偈の言語状況は共通の特色を示す。動詞の用法が多彩で，1人称 sg. を中心に 2. sg., 3. sg./pl. で直接法現在・願望法・命令法・未来・過去（aorist, 完了）が用いられ，1人称代名詞や voc. とあいまって生き生きとした感情を表現している。短音の連続を好む特殊な韻律の要請で Skt. の規範から逸脱する語形が頻出するが，単に一時的な metri causa (m.c.) ではなく，特定の中期インド語（mi.）方言が根底にあることを予測させる。

特に顕著な現象は語末長母音の短音化で名詞・動詞・不変化詞・複合語前肢を通じて起こり，原則として *o*>*u*, *e*>*i*, *aṃ*>*a* となる（mi. に一般的な短音 *o*/*e* は現れない）。この原則から逸脱するのは *a*-語幹名詞活用で，1）-*o*（nom. sg. m.）に対して -*u* と -*a* の両方が現れ，-*u* がやや多い；2）-*aṃ*（acc.sg.m./nom.acc. sg.nt.）に対しては1例のみ -*u* で，残りは -*a*；3）代名詞では *ayaṃ*>*ayu*, *ahaṃ* >*ahu*。以上の現象は一般の Pkt. よりも進んだ段階に属し，Apabharaṃśa (Ap) ないし Gāndhārī (G) と共通するが，時代・地域の対応から G が原語である可能性が強い[9]。名詞活用における -*a* と -*u* の比率は，GDhp 1）-*u* が圧倒的，2）-*a*：-*u*＝2.5：1，3）*idaṃ*>*ida*, *ahaṃ*>*ahu*/*aho*（1例のみ *aha*）[10]；NiyaG 1）2）男性・中性及び nom・acc の区別が失われすべて -*a*，3）*ahaṃ*>*ahu*。歎仏偈・重誓偈は GDhp と NiyaG の中間段階に位置するかと思われる。

子音はほぼ完全に Skt. 化されているが，語頭子音結合は原則的に単音価値である。本来の発音を示唆する1例は：歎 9b *ediśati*<＊*edhiśati*（<＊*edhiśśatı*<＊*edhiṣyati* 3. sg. fut.「幸福になるであろう」）。G 特有の変化 -*ṣy*->-*śś*-/-*ś*- が写本に残る[11]；*dh* の気息喪失（mi. 方言には稀）は NiyaG に見られるように中期イラン語方言（サカ，バクトリア，ソグド等）の影響かも知れない。他にも注目すべき現象が多いが，重誓偈の方が歎仏偈より幾分進んだ言語状況を示す。

5.　［結論］歎仏偈は内容・韻律・言語に関し大乗仏典として顕著な古さを示し，本来，より素朴な光明を特質とする仏（註2参照）の讃嘆とその前での誓願を内容とする独立した作品であった可能性がある。重誓偈は全ての点で歎仏偈より新しく，歎仏偈を意図的に模倣した節が窺える。歎仏偈の原初形態は，西北インド（またはそれに近い中央アジア）で紀元前1世紀から紀元後2世紀頃（恐らくイラ

ン系勢力の影響下に）中期インド西北方言で成立したかと推測される。

---

1) 本稿は藤田宏達：梵文無量寿経写本ローマ字本集成（上巻1992）に依拠する歎仏偈・重誓偈の原典批判に基づく。テキスト・訳・註・語形表は別に発表予定。

2) 歎仏偈冒頭 *amita-prabha-*, *anantatulyabuddhi-* (<*anantā°*) は散文の Lokeśvararāja 如来に対応するが，歎仏偈だけを読むと独立の如来名とも解釈可能。*amita-prabha-* は SukhV 後半の A・東方偈・E では阿弥陀を，F ではより下位の別の如来を指す。本来は光明仏に対する起源の古い epithet であったかと思われる。

3) Max Müller/Nanjio 本および足利本では最初の2句が散文扱いされる。

4) Pāli Vinaya I 40; Mvu III 62; Catuṣpariṣatsūtra 28b.10, 28c.6, 8.

5) 大阿弥陀経（通称）（大正 XII 300ff.）［支謙（3c.前半）/支婁迦讖（180頃）?］；無量清浄平等覚経（279ff.）［支婁迦讖/帛延（白延）(258)/竺法護(308)?］；無量寿経（265 ff.）［仏陀跋陀羅と宝雲（421）?］；無量寿如来会＝大宝積経17-18（XI 91ff.）［菩提流志（8c.初）］；無量寿荘厳経（XII 318ff.）［法賢(991)］；'Phags pa 'od dpag med kyi bkod pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo（大宝積経5章）［9c.初?］

6) Cf. 阪本純子，仏教研究 VII, 1978, 155-176; 印仏研 XXVI-2, 1978, 89-94。BHS の mā. 詩節には仏伝・本生の他に讃仏・誓願を内容とするものが多く，大乗思想原初形態との深い関係が推測される（cf. *bhāṇaka*「［音楽的］講談家；説教師」）。

7) Dīghanikāya (30) Lakkhaṇa-sutta は Pāli 経典として異例の新しい韻律を示し，proto-puṣp. 8偈（III 150f., 153f.）と puṣp. 4偈（163f.）を含む。中阿含経(59) 三十二相経（大正 I 493a-494b）は散文のみで，Pāli の偈頌は二次的増広と思われる。

8) 仏塔信仰・観音菩薩との関係は静谷正雄，初期大乗仏教の成立過程，p. 262 参照。

9) Ap は5-12世紀文学作品に残る mi. 最終段階；G は Aśoka 碑文（B.C. 3c. 中），G-Dharmapada（現写本は A.D. 1-2c.；成立は古い），Niya 文書（A.D. 3-4c.）等に残る mi. 西北方言。Ap と G の関係は未解明。H. Smith 等は BHS に Ap の痕跡を見る；Brough は漢訳語と G の対応を指摘。阿弥陀の原語は *amitābha-* の G形 **amidāha-*>**amidāa-*/**amidā̆-*（母音間 *h* 脱落：GDhp・NiyaG；cf. *sukhāvatī*>**suhāmadī*>**suāmadī*：須摩題，須摩提）で，これを一方で *amita-*＋*-ya-*(*/-ka-*)suffix と解して「無量（尊・世尊・覚）」と訳し，他方では nom./acc. sg. **amidāu* を *amitāyus* と解釈して Skt. 化し又「無量寿」と訳した可能性が強い。

10) 但し GDhp の表記 *a* は［*a*］，［*ā*］，［*aṃ*］の3音価に対応。

11) Aśoka 西北碑文，GDhp, Niya に共通（未来 suffix に限り GDhp は -*ṣ*-）。Kharoṣṭhī 文字の文献からは -*s*- が単音か二重音か不明。未来 suffix -*sya-*/-*ssa-* の単子音化は Pāli・BHS に m.c. で現れる；cf. mi. -*sya-*>*-*si-*>-*hi-*。

〈キーワード〉 Sukhāvatīvyūha，無量寿経，韻律，mātrāchandas, Gāndhārī

（大阪大学非常勤講師，Dr. de 3e cycle）